

I 結核発生動向の概要

結核発生動向の概要

大阪市の全結核罹患率（人口 10 万対）は、1999（平成 11）年 107.7 から 2017（平成 29）年 32.4 まで低下した。一方全国の罹患率は 1999（平成 11）年 34.6 から 2017（平成 29）年 13.3 まで減少していた。大阪市の喀痰塗抹陽性肺結核罹患率は、1999（平成 11）年 34.7 から 2017（平成 29）年 13.6 まで低下し、全国の罹患率は 1999（平成 11）年 11.4 から 2017（平成 29）年 5.0 まで減少していた。全結核罹患率・塗抹陽性肺結核罹患率ともに、全国と比べ大阪市の方が減少率は大きかったが、それぞれ 2.4 倍、2.7 倍と依然として高い状況が続いている。

結核死亡率（人口 10 万対）をみると、1999（平成 11）年 6.9 から年々減少していたが、2010（平成 22）年以降は増加傾向に転じていた。その後、2013（平成 25）年 4.8 をピークに再び低下傾向となり、2015（平成 27）年は 3.4 であった。そして、2016（平成 28）年からは再び増加傾向に転じ、2017（平成 29）年は 4.6 に増加していた。

大阪市では 2016（平成 28）年から、70 歳以上の結核患者の占める割合が 52.8% になり新登録結核患者全体の半分を超え、2017（平成 27）年も 52.8% で全体の半分を超えている状況である。大阪市および全国ともに、結核患者の高齢化が進んでいる。

年齢別罹患率をみると、大阪市の 2017（平成 29）年は、60 歳以上から罹患率 40 を超えており、80 歳以上の罹患率が 136.8 と最も高く、全国と比較すると、特に 50 歳代、60 歳代の罹患率が高く、それぞれ 3.4 倍と 3.8 倍であった。

大阪市 24 区の罹患率をみると、2011（平成 23）年に西成区においてはじめて 200 を下回り 2017（平成 29）年は 165.7 であったが、依然として 24 区で最も罹患率が高かった。引き続き、結核健診による患者の早期発見と確実な治療が重要である。

外国生まれ結核患者数は、2017（平成 29）年は 53 人であり、割合としては 2011（平成 23）年 2.8% から 6.0% に増加していた。特に 20 代でみると 2011（平成 23）年 23.0% であったのが、年々増加し、2017（平成 29）年には 55.0% となり増加が顕著となっていた。全国においても 62.9% と全体の半数以上となっている。日本語学校健診による患者の早期発見や医療通訳派遣事業などの患者支援が引き続き重要である。